

ケダモノ皇帝が旦那様になったらイチャつき過ぎですっ、陛下のばかばかっ！

†  
ケダモノ皇帝が旦那様になったらイチャつき過ぎですっ、陛下のばかばかっ！ †

(KADOKAWA ジュエル文庫)

藍杜雫

プロローグ ロッテンベルグ公爵令嬢の嫁き遅れの理由

ロッテンベルグ公爵令嬢は二十一歳にもなって、嫁いき遅れの変わりもの。

そんなふうに関わりから言われているのを、アリアは知っていた。

公爵令嬢とは名ばかりの田舎暮らしで、華やかな社交界とは無縁のロッテンベルグ家だが、領地ではさすがに注目を集めてしまう。

「なにか変わった性癖があつて、結婚できないのでは？」

などという失礼な噂まであり、一時は家族からも心配されていたが、アリアはなかば無視を決めこんでいた。

公爵令嬢という身分があり、とりたてて美人ではないが、控えめに愛らしい容姿。

蜂蜜色の波打つ金髪を背中を覆うように流している。

社交界の話題に上る華やかさはないにしても、婚約者もなく、結婚の予定がまったくな

いと聞かされると誰もが首を傾げる。

それがロツテンベルグ公爵令嬢アリアの評価だった。

アリア自身、独身を貫いて意固地になっている自覚はある。けれども、嫁き遅れになったのには理由があった。

「もし正式な騎士になれたら、アリアは俺の花嫁になつてくれないか」

幼いころ、アリアの前に跪き、プロポーズしてくれた幼馴染みがいたのだ。

「いつか、帝都で騎士になつてアリアを迎えに来てやる」

そんなふうにご告白してくれた彼が迎えに来るのをアリアはひたすら待ちつづけ、いつしか婚期を逃した変わりものになつてしまった。

やさしくて賢い幼馴染み。彼と町はずれの小道を並んで歩く——ただそれだけのひとと  
きが、どれほど楽しかっただろう。

彼との逢瀬は、子ども心にも、いつもどきどきしたものだつた。

（もうとつくに、忘れられているのかもしれない……）

そう思いながらも、アリアはかつて彼が住んでいた騎士寺院へと足を運ぶ。

黒い森の端に建つ騎士寺院には、家族の誰も知らないアリアの秘密を隠している。

大人になつたいまも、その秘密を思い出すだけでアリアの胸は甘く切なくなるのだつた。

## 第1章 初恋の思い出はシロツメクサの花冠とともに

もう、十年以上前になるだろうか。

家族に誕生日を忘れられていたことがショックで、家出をしたことがあった。アリアが七歳のときのことだ。

そのとき慰めてくれたのが騎士見習いの少年——ヴォルフだった。

公爵家に生まれたと言っても、女兒のアリアは、跡継ぎの兄のおまけのようなもの。それが、弟が生まれるとますます家での居場所がなくなつた。そう感じていた。

いくらお金もあり、生活が満たされていると言っても、アリアはまだ幼い。両親からの愛情に飢えていたのだ。

すぐそばで、兄と弟が格別愛されていれば、なおさら。

「みんなアリアよりレオン兄さまや弟のハインツのほうが大事なのよ」

子どものころよくあるように、アリアは自分のことを名前で呼んでいた。

家庭教師からは「公爵令嬢としてみつともないから、『わたし』とおっしゃってください」と注意されていたけれど、まだ幼いアリアには、公爵令嬢としての自覚はあまりない。それで、気がゆるむとつい、「アリアはね……」と自分を名前で呼んでしまうのだった。

「朝起きて、おめでとも言うてくれないなんて……」

誰からも大事にされていないというのはうすうす感じていたけれど、弟が熱を出したからと、アリアの誕生日を忘れられていたのはさすがにショックだった。

子どもの小さな世界では自分の誕生日というの是一大イベントだ。

一年でいちばん晴れやかで、誰でも主役になれる日。

そんなふうにして当然だろう。普段から女兒のアリアは軽んじられがちだったけれど、誕生日の今日ぐらいいは違っていると信じていた。それだけに、忘れられたことにひどく傷ついてしまったのだ。

（どうせ、アリアなんかいなくてもいいんだわ）

そんな自暴自棄の気分で、アリアは屋敷を抜けだした。

ロッテンベルグ公爵家は屋敷の敷地をぐるりと鉄柵で囲い、出入口には門番がいる。しかし、庭の隅のほうで古い通用門が壊れて抜け道になっているのを知っていた。隙間はわずかだったけれど、アリアの小さな体は簡単に通ることができるのだ。

街に出るときは普通、馬車に乗っていたし、アリアはひとりで外に出たことはない。しかし、そのときのアリアは妙に行動力があつた。それだけ、家族に失望していたのだろう。家の前の道をどこまでもどこまでも歩いて、まったく見たことがない場所まで辿り着くほどに。

「うわあ……綺麗な建物……」

小道の先に黒い森が近づいたころ、黄色い石でできた高い塔が現れ、アリアは感嘆の声をあげた。

大きな屋敷に住むアリアでさえ、圧倒されるドーム屋根に、紋章が浮き彫りされたフアサード。アリアが知るなかでは教会にもっとも似ているけれど、街の教会や屋敷の礼拝所とは雰囲気が違う。どこか秘密の匂いが漂う建物だ。

見知らぬ建物を恐れる気持ちはあつたが、ずっと森や野原しか見えない道を歩いてきたせいで、人が建てたものというだけで心を寄せていた。歩き疲れてもいた。

それでアリアは、大きな扉の前のわずかな階段に腰を下ろしてしまった。

「ふう……足が痛くなっちゃった」

怒りでここまで歩き続けてきたけれど、体は休みたがっていたのだろう。

座ったとたん、もう立ちあがれないと思うくらい、体中が悲鳴をあげていた。

ひとりでぼつんといると、建物の周りはやけに静かだ。

いくら両親から注目されていないとはいえ、公爵令嬢のアリアの周りにはいつも侍女や家庭教師といった誰かがいた。

屋敷の庭はまだしも、こんな誰もないところに来るのは初めてで、風の音に木々がざわめくと、なおさらアリアがひとりなのだと思えてくる。

「本当なら、今日はお誕生日のお祝いをして、ケーキを食べているはずだったのになあ」  
特別な日に作ってくれる真っ白なクリームのケーキを、アリアはもうずいぶん前から楽しみにしていた。

なのに、数日前から弟の具合が悪くなり、屋敷中が弟の容態に一喜一憂し、振り回されることになった。アリアの誕生日なんて忘れられてしまったのだ。

（お父さまもお母さまも……レオン兄さまだって、ハインツのことばかり。アリアのことなんて、どうでもいいんだわ）

そう思うと、大きな灰青色の瞳にじわりと涙が浮かんで、あっというまに溢れた、そのときだった。

「こんなところで、なにをしている!？」

誰何する声にぎくんと身が震える。

弾かれたように顔を上げた先にいたのは、アリアの兄と同じくらいの年の少年だ。

黒髪に紫色の瞳を持つ彼は、チュニツクにブリーチズを着ている。いわゆる、騎士見習

いの格好だ。

貴族の子弟であり、上品なシャツとキュロットを着る兄弟を見慣れているアリアには、騎士見習いというものがよくわからないが、少しだけ怖い。

ただでさえ、子どもの世界では、自分より背が高く、年が上の存在には無条件で身構えてしまうところがある。

小道をひとりで歩いているときは建物が見えてほっとしたが、この建物の住人にしてみれば、入口に座りこまれるのを嫌うかもしれない。とっさにそんなことを考えたアリアは、いたずらを叱られる子どものように身をすくめた。

「ご、ごめんさい……アリアは、不審者じゃありませんから！　すぐにいなくなりますので……お、怒らないで」

上に兄がいるせいだろうか。アリアは話しはじめると、七歳という幼さのわりに、達者に言葉を操る。懸命に身を縮めて弁解すると、泣いていた少女がいきなり饒舌に話したのがおかしかったらしい。声をかけてきた少年は突然、くつくつと笑いだした。

「不審者じゃないって……そんなことはわかってる。騎士寺院に用がある不審者は、間違ってもおまえみたいじゃないからな」

そう言って、アリアの額をつんと指先でつつく。

痛いわけではないが、『ちび』と呼ばれたこともなければ、見知らぬ少年に額をつつかれ



たこともないアリアはびつくりして固まった。

(な、なに……？ なんなの、この人は……)

兄弟から受ける扱いとは違う。粗野なのに、自分をまつすぐに見て話されて、アリアはどうしたらいいかわからなかった。額を小突かれるような仕打ちに少女が衝撃を受けているとも知らず、少年は言葉を続ける。

「おい、ちび。ここまで誰に連れてきてもらった？ 騎士寺院から街までは遠いだろが。それとも、迷子か？」

またしても、額をつつかれてアリアは怯んだ。

『ちび』と呼ばれるたびに、いつも以上に自分の存在を軽んじられている気になり、アリアは唇を尖らせる。それでいて、淋しかったせいで、話しかけてもらえること自体はうれしい。そんな複雑な感情が渦巻いていた。

「アリアはひとりで歩いてきたのよ。このぐらい歩けるし、それに……誰もアリアのことなんか気にしてないもの……」

子どもならではの虚勢を張って答えるうちに、また悲しみが沸き起こる。

馬車に乗せて運んでくれるような人なんていない。それを思い出すと、また胸が塞がり、大粒の涙が溢れてきた。

「お、おい……ちび。泣くな……なんで泣くんのだ？ お腹でも空いているのか？」

おろおろした少年は、慰めるつもりなのだろう。たどたどしい手つきでアリアの頭を撫でる。

「お腹なんて空いてないっ……ケーキ……が食べたかったの……」

アリアはしゃくりあげながら、途切れ途切れの言葉を返す。

「ケーキだあ？ 贅沢なちびだな……いや、そういえばおまえ、ずいぶん小綺麗な格好をしているな。どこの貴族のご令嬢さまだ？」

騎士見習いの少年は、ずいぶんと口が悪い。アリアはその乱暴さにわずかに怯えながらも答えた。

「だ、だって今日はアリアの誕生日だったんですもの……本当は、お母さまがケーキを用意してくださいって、お祝いをするはずだったのに……」

『「だったのに」とは、どういうことだ。いい家のご令嬢さまなんだから、好きだけ贅沢なお誕生日会が用意されていたんだろう？」

皮肉めいた言葉を吐くくせに、少年の声はやさしい。アリアが次第に落ち着いて説明できるとなったのはそのせいだろう。

「ハイイツがね……弟が、熱を出したの。だから、お母さまはアリアのことはどうでもよくなってしまうたの」

「……………そうか」

短い肯定の言葉には、アリアを慰める響きがこめられていて、アリアはまた泣きたくなかった。けれども、また怒られるかもしれないから、少年のチュニツクの裾を握りしめて、堪えていた。

「おまえは弟が嫌いなのか？」

問いかけてられて、またぐつとのどの奥から悲しみが押し寄せてくる。

彼の言葉には、非難する響きがない。だから、アリアはしゃくりあげそうになりながら、考えた。

「くっ……ううん……別に、嫌いじゃないわ……ハインツは、アリアの弟だもの……」

弟はまだ小さくて、アリアだって守ってあげなくてはという気持ちがある。しよつちゅう熱を出してばかりいて母の愛情を奪われたという妬みは抱いているけれど、決してアリアは弟が嫌いではなかった。

「じゃあ、おまえは淋しいんだな」

そんなふうによさしく言われて、どきりとした。

弟が病気なのに、自分の誕生日を祝って欲しいなんてわがままでひどい姉だ。

幼くても、うすうすそんな感情をアリアは抱いていた。なのに、いま抱いている感情が憎しみでも怒りでもなくて、淋しさだと言われるとは思わなかったのだ。

(アリアは……淋しいのかしら……)

自分の感情を確かめるように、胸に手を当てて考える。

そうやって震える唇を引き結ぶ少女は、少年の目にも健気に映ったのだろう。気がついたときには、アリアは少年の腕に抱きしめられていた。

「誕生日を祝ってもらえないのは……辛いよな。泣いてもいいぞ、ちび。俺が許す」  
偉そうな物言いで言われたのに、そんなことはどうでもよかった。

泣いてもいいと言われたとたん、せき止めていた感情がどつと迸る。少年の腕のなかで、アリアの瞳からわっと涙が溢れだしてしまった。

この少年は初めて会ったというのに、家族の誰も気にかけてくれなかった自分を抱きしめてくれている。それだけで十分だった。

(アリアは……ここにいてもいいの?)

少年の腕がぎゅっと自分を抱きしめてくれると、自分の存在を認められた心地になる。

何度も何度もアリアの波打つ金髪やしやくりあげる背中を、少年の手がたどたどしく撫でてくれたのも、泣いていいよと言われていている気にさせられる。

アリアは少年のチュニツクをたくさん濡らして泣いた。

「つく……うつ……うつ……」

小さな子どもの嗚咽が繰り返し繰り返し、騎士寺院のファサードで響く。

その間も騎士寺院はひっそりと佇み、風が木々を揺らす音が聞こえるだけだった。

+ + +

アリアがひとしきり泣いたあと、少年は騎士寺院だという建物の大扉を開けて、なかへと少女を案内してくれた。

広くて大きな空間は、やはり教会を思わせるけれど、どこか異質だ。

神の威光を示す金銀の飾りがなく、素朴な石の浮き彫りがぐるりと天井を囲んでいるせいでどうか。その古めかしい浮き彫りをアリアがふしぎそうに眺めていると、少年がくすりと笑った。

「騎士寺院に入るのは初めてか？ あれは帝国の建国叙事詩だ……その昔、騎士団と異民族が戦ったという……」

「けんこくじょじし……」

アリアの知らない言葉だが、なんとなくわかった。

ヴァイスハイム騎士帝国はもともと、国を持たない騎士団がはじまりだと家庭教師から聞かされていたからだ。

アリアが住む地域にまだ国というものがなかったころ、騎士団が寄り集まって建国を宣言したのが、ヴァイスハイム国だ。のちに、ほかの騎士団も賛同し、ヴァイスハイム国は

ヴァイスハイム騎士帝国と名を改め、近隣の国を呑みこむ大帝国となった。

「この寺院は、騎士団がいる場所なの？」

アリアはびっくりして尋ねていた。

物語に出てくる騎士団の住み処——騎士寺院はどれも壮麗な建物として描かれ、騎士団というように無数の騎士が暮らす場所だった。なのにアリアは、この騎士寺院のことをいま初めて知ったし、しかも建物のなかに人の気配がないのだ。

街の教会の身廊も天井が高い空間が広がっているけれど、それでもどこかに人の気配がした。

街の人が祈りに来ていたり、修道士が自分の義務を果たしていたりといった生活の音が聞こえて、広い空間のどこかに人がいることを伝えていたのに、この寺院はまるでなにもかもが眠っているかのように静かだ。

「そうだな……騎士団がいると言えばいるが……ここにいるのは、騎士がひとりと半人前未満の俺だけだ。勇猛果敢な騎士団の駐屯地とは言えないだろうな」

苦笑しながら言われたけれど、細かいことはよくわからなかった。

「ようするに、ここに住んでいるのはふたりだけということなの？」

アリアがそう結論づけると、少年は「そうだな」とやっぱり苦い笑いを浮かべて答えた。

アリアが物珍しそうに眺めていた礼拝堂を通り抜け、少年は裏庭へと向かった。どうや

ら、アリアの泣き腫らした顔が気になったらしい。

ポンプ式の井戸の近くまで連れていき、からくりの把手を動かす。

するとあつというまに、木桶いっぱい水が溢れた。

「ほら、顔を洗え。泣いていた目が真っ赤だぞ」

別に言うことを聞く謂われはないとわかっていたが、アリアは少年の指示に従った。

彼がアリアを蔑ろにして乱暴な物言いをしているわけではないと、だんだん理解してきたからだ。

透きとおった水に小さな手を入れると、ひんやりと気持ちいい。冷たい水で何度か顔を洗うと、荒ぶっていた気持ちまでもが流されて静まっていく気がする。

少年が差し出した手ぬぐいで水を拭って返すと、少年はアリアの髪についた滴を拭いてくれた。

「綺麗な蜂蜜色の金髪だな……親がどう思おうと、きつとおまえは大きくなったら美人になつて嫁ぎ先でしあわせになれるぞ」

少年はアリアに言い聞かせるように言った。それは予言というより、アリアを励ましための言葉のようだった。

「しあわせに……本当？」

単純なもので、少年の言葉にアリアはぱつと笑顔になる。

さっきまでの暗い気持ちが嘘のように消え、アリアは少年の評価を変えた。

(このお兄さん、ちょっと乱暴だけどいい人だ……)

幼い子どもはやさしさに弱い。次第に懐いてきたアリアの手を引いて、少年はまた歩きます。もう少年に慣れていたせい、アリアはおとなしく手を繋がれたままでした。

「どこに行くの？」

「どこにも行かない。この寺院の敷地のなかだから安心しろ」

アリアの素朴な疑問に、少年はぶっきらぼうな言葉で答える。

こんなふうには、誰かとふたりきりで向き合ったのが久しぶりだったせいで、少しだけすぐつたい。

わずかに歩いて、連れられたのは寺院の裏手にある庭だった。

「わあ……お花がいっぱい咲いてる」

感嘆の声をあげて、アリアは外の空気を胸いっぱい吸いこむ。騎士寺院は人がいないせい、カビと埃の匂いがしたため、外の空気が余計にうれしい。

初夏の庭は素朴な草花が咲き乱れ、さわやかないい香りが漂う。

その香りを胸いっぱい吸いこむと、アリアは自然と笑顔になった。

少年に連れられ、さらに庭の奥へ進むと、一面にシロツメクサが咲く区画に辿り着いた。白い花が緑の絨毯のなかに無数に開き、まるで地上に星が咲いたようだ。



公爵家のきちんと管理された庭とは違い、雑然としてはいたものの、生命力に満ちた美しさがあった。

「すごいわ……クローバーがいっぱい……白いお花もかわいい」

「女の子って本当にこういうのが好きなんだな」

アリアがシロツメクサのなかへと走りだすと、少年も苦笑しながらあとをついてくる。なんだかふしぎな気分だ。

使用人以外と話をするのは久しぶりだったが、その相手が見知らぬ少年だなんて、公爵令嬢としていかなものかと思う。

アリアは不意に照れくさくなって、俯いた。

シロツメクサのなかにはクローバーが混じっており、葉っぱが四つになったものには幸運が授かるという言い伝えを思い出す。

それを探すふりをして、火照る頬を冷ましていると、騎士見習いの彼もふと思いついたように、野原に座りこんだ。

シロツメクサの花を選んで摘みとったかと思うと、なにやら器用に指を動かしている。

「なにをしているの？」

「ちよっと待っている」

アリアが首を傾げてのぞきこむと、少年はやはりぶっきらぼうに答える。

初めは怖かったはずなのに、いつのまにか少年の物言いに慣れて、少しばかり乱暴な言い方をされても、アリアも気にならなくなっていた。

それに、少年の指先が器用なのに見蕩れてしまっていた。シロツメクサの茎を束ねて、くるくると茎に茎を継ぎ足して編むさまに見入っているうちに、あっというまに花冠ができあがった。

「ほらよ……ケーキじゃないが、誕生日プレゼントだ、ちび」

そう言つて、シロツメクサで編みあげたばかりの花冠を、アリアの頭にちよこんと載せてくれる。

「誕生日……プレゼント……？ この冠が……？」

アリアは驚いて、手を頭に伸ばして触れた。

やわらかい花の感触が指先をそつと撫でる。作っているところを見ていたし、周りがシロツメクサの野原だから、どんなものが頭に載せられているかはわかってる。しかし、花冠を頭上に載せられるのは、形を知っているとは別の喜びがあった。

しかも、シロツメクサのほかになにか香草を交ぜたのだろうか。花冠からはやけにいい香りがして、アリアはふわりといい気持ちになった。

「よく似合っているじゃないか。まるでどこぞのお姫さまのようだぞ、ちび」

そんな言葉をかけられると、なおさらうれしい。なのに、恥ずかしくもあって、かあつ

と頬が熱くなる。

凜々しい顔立ちの少年から、そんなことを言われて、アリアはどうしたらいいかわからなかった。ただ、胸の鼓動だけが、ときどきと不規則に速まってしまう。

自身の兄弟も貴族的な顔立ちをしているが、少年は整ったなかにも獣が持つような鋭さがあり、アリアは目を奪われてしまっていた。

「あ、ありがとう……あの……」

ぽーっと頬を赤らめたアリアは、名前を呼ぼうとして初めて、少年の名前を知らないことに気づいた。

「あの……アリアはね、ちびではなくて、アリア・テレーズ・ロッテンベルグです。はじめまして、小さな騎士さま」

礼儀作法の先生からうるさく言われたことを思い出し、花冠が落ちないように立ちあがって言う。スカートを両手で掴み、軽くかがんでお辞儀をしながら。

相手の名前を聞くときには、自分の名前をまず名乗りなさいと言われていたからだ。

「ロッテンベルグ……もしかして、公爵家のものか……？ まいったな」

「はい。アリアのお父さまは、ロッテンベルグ公爵です。それがなにか？」

名を名乗ったところで唸られ、アリアはかわいらしく首を傾げる。

「うーん……まあ、いいか。では、アリア。あらためて、お誕生日おめでとう。俺の名は

ヴォルフだ……だが、俺とここで会ったことは、公爵家の人間には内緒だぞ？」

「ヴォルフさま……なぜ？」

そう問い返したのは、実を言うと大した意味はなかった。

アリアはまだ小さくて、わからないことにすぐ「なぜ？」と聞く癖がついていたのだが、その問いの答えを本当に知りたいかどうかまで考えていなかったからだ。

「公爵家のものとは、あまり関わりたくないからだ……騎士寺院に見知らぬ騎士とその見習いがあることぐらいは公爵も知っているだろうが、騎士寺院は公爵家に挨拶する義務があるわけじゃないし……知らないほうがいいこともある。それと、さまはなしだ。ただのヴォルフでいい」

まるで謎かけのような言葉は奇妙だ。

けれども、アリアは小さな頭を揺らして、こくんとうなずいた。

少年——ヴォルフが悪い人だとは思えなかったし、子どもというのはいつだって、親に内緒の秘密を持ちたいものだ。家族に内緒の友だちという言葉に背德的な魅力を感じて、アリアは不謹慎にもわくわくしていた。

「わかったわ。ヴォルフとアリアの秘密ね！」

アリアがにつこりと笑いながら言うのと、ヴォルフも整った顔を綻ばせる。シロツメクサの野原で見た笑顔に、子どもながらも胸がときめく。

——これがアリアの幼い初恋のはじまりだった。

十 十 十

家出をしようと思つたほど悲しかったのに、ヴォルフに話を聞いてもらつたあとで公爵家に送り届けられると、アリアの気持ちはもう落ち着いていた。

長い時間留守にしていたはずなのに、庭で遊んでいても思つたのだろう。家人は、弟の熱に振り回されて、アリアの不在に気づかなかつたようだ。

誰にも咎められることなく自分の部屋に戻り、ほっと胸を撫でおろしたアリアは、シロツメクサの花冠を被つた姿を鏡に映した。

クリームと果物たっぷりのケーキはなかつたけれど、シロツメクサの冠は豪華な宝石にも負けない輝きがある。

それに、男の子の手で冠をかけてもらったのも、恥ずかしくもうれしかった。

幼いアリアは、まるで自分がお姫さまになつたような気分になつて、冠を被つたまま鏡の前でくるくると回る。

もどかしくて、くすぐつたくて——気持ちがあふわりと舞いあがる。

（あの男の子に——ヴォルフにまた会いたい……）  
家に戻ってきたばかりなのに、アリアの心はもう次に騎士寺院を訪れることしか考えられなくなっていた。

†  
ケダモノ皇帝が旦那様になったらイチャつき過ぎですっ、陛下のばかばかっ！ †

(KADOKAWA ジュエル文庫)

藍杜雫

平成二十九年二月一日

ISBN 9784048927635

このデータは禁無断転載・禁無断使用・禁無断複製・禁無断転売です  
勝手に再配布なども禁止です。

ネット上で無断転載した場合、そのデータを公開しているサイト、データベース、サーバーともに  
データ無断使用の連帯責任を負うものとします。